

『徒然草』「花は盛りに」(文法)

花は盛りに、月はAくまなきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、たれこめて春の行方知ら①ぬも、なほBあはれに情け探し。咲き②ぬべきほどの梢、散りしをれ③たる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれ④りけるに、早く散り過ぎ⑤にければ。」とも、「さはることありて、まからで。」なども書け⑥るは、「花を見て。」と言へ⑦るに劣れ⑧ることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。

よろづのことも、初め終はりこそCをかしけれ。男・女の情けも、ひとへにあひ見るをば言ふものかは。あはでやみにし憂さを思ひ、Dあだなる契りをかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言は⑨め。

望月のくまなきを千里のほかまで眺めたるよりも、暁近くなりてE待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢にF見えたる、木の間の影、うちしぐれたるむら雲隠れのほど、またなくあはれなり。椎柴・白檜などの、ぬれたるやうなる葉の上いきらめきたるこそ、身にしてみて、心あらん友もがなと、都恋しうGおぼゆれ。

すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、H興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄り立ち寄り、あからめもIせずまもりて、酒飲み、連歌して、果ては、大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手・足さしひたして、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

問一 傍線部A～Iについて、動詞は活用の行・種類と活用形を、形容詞と形容動詞は活用の種類と活用形を答えなさい。

I	G	E	C	A
	H	F	D	B

問二 傍線部①～⑨の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

⑨	⑦	⑤	③	①
	⑧	⑥	④	②

花は盛りに、月はAくまなきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、たれこめて春の行方知ら①ぬも、なほBあはれに情け探し。咲き②ぬべきほどの梢、散りしをれ③たる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれ④りけるに、早く散り過ぎ⑤にければ。」とも、「さはることありて、まからで。」なども書け⑥るは、「花を見て。」と言へ⑦るに劣れ⑧ることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。

よろづのことも、初め終はりこそCをかしけれ。男・女の情けも、ひとへにあひ見るをば言ふものかは。あはでやみにし憂さを思ひ、Dあだなる契りをかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言は⑨め。

望月のくまなきを千里のほかまで眺めたるよりも、暁近くなりてE待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢にF見えたる、木の間の影、うちしぐれたるむら雲隠れのほど、またなくあはれなり。椎柴・白檜などの、ぬれたるやうなる葉の上にくらめきたるこそ、身にしてみて、心あらん友もがなと、都恋しうGおぼゆれ。

すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、H興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄り立ち寄り、あからめもIせずまもりて、酒飲み、連歌して、果ては、大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手・足さしひたして、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

問一 傍線部A～Iについて、動詞は活用之行・種類と活用形を、形容詞と形容動詞は活用の種類と活用形を答えなさい。

I	サ変	未然形			
G	ヤ・下二	已然形	H	サ変	連体形
E	ダ・下二	連用形	F	ヤ・下二	連用形
C	シク活用	已然形	D	ナリ活用	連体形
A	ク活用	連体形	B	ナリ活用	連用形

問二 傍線部①～⑨の助動詞の意味と活用形を答えなさい。

⑨	推量	已然形			
⑦	完了	連体形	⑧	存続	連体形
⑤	完了	連用形	⑥	存続	連体形
③	完了	連体形	④	完了	連用形
①	打消	連体形	②	強意	終止形